



特集

災害時、 だけじゃない。

地域をつなぐ消防団

火災や水害が起こった時に、いち早く行動し対応にあたる消防団。こうした緊急時の活動が目立ちますが、実は活躍の場はそこだけではありません。

「地域を守る」という使命に向けて、さまざまな思いを持ち、多くの場面で奔走する団員の姿を追いました。





安来市消防団組織図

安来方面隊

安来分団、赤江分団、荒島分団
飯梨分団、能義分団、大塚分団
宇賀荘分団、島田分団
安来方面隊付

広瀬方面隊

広瀬分団、布部分団
比田分団、山佐分団
広瀬方面隊付

伯太方面隊

赤屋分団、井尻分団
母里分団、安田分団
伯太方面隊付

女性隊

平成 30 年 4 月 1 日現在
団員数 700 人



渡邊公平さん

「普段出会わない地域の人と交流ができるところが消防団の良さの一つです」と話すのは、今年の 4 月に赤江分団に入団し

地域の「一員」として

た渡邊公平さん（25歳）。消防団に入団してから地域の行事への参加が増え、地域の人と話すことも増えたと言います。

消防活動だけでなく、地域のつながりによるコミュニケーションの維持にも消防団が一役買っていることを教えてくれました。

そんな渡邊さんですが、入団当初は消防団でどのようなことをするのか分からず戸惑いがあつたそうです。それでも「月

2 回の水出しや市の操法大会への参加を通じて、同じ分団の人と仲良くなり不安は薄れていきました」と笑顔で話します。

分団の人と最も親睦を深めたという消防操法大会を「赤江分団は操法大会に力を入れており、練習も多く大変でした。しかし、補助員という立場ではあつたものの小型ポンプの部で優勝できた時はとても達成感がありました」とうれしそうに振り返ります。大会で優勝し地域の人に声をかけられることが増えたそうです。

防災活動では「台風前に注意

地域を支えるリーダー

消防署の職員は職務として災害や救急時などの対応を行います。一方で消防団は、普段はそれぞれ仕事などをしている人が、いざというときに率先して消火活動や救助活動をする団体です。

消防団の活動が注目されるのは火災や水害などが起きた時ですが、活躍の場はそういった時だけではありません。地域行事のボランティアや、行方不明者の捜索など、地域に根ざした活動を行っており、まさに地域の

喚起をして町内を回ったことが印象に残っています。家が梨農家ということもあり、活動後は台風などの予報が出ると、裏山などの崩落をこれまで以上に気にするようになりました。また、周辺の危険箇所が目につくようになりました」と防災の目が養われ、地域に目が向くようになったことを口にします。

「地域の「一員」として消防団をすることは責任を感じます」と渡邊さん。防災活動と地域のコミュニケーションの維持という役割を担う新人団員の眼差しからは強い思いが伝わってきます。

リーダーと言えます。

組織は大きく分けると、安来方面隊、広瀬方面隊、伯太方面隊、女性隊の 4 つに分かれています。各方面隊はさらに地区ごとに分団があり、全部で 20 分団。現在、700 人の団員が所属しています。

最近では女性の活躍も目立ってきており、25 人の団員が女性隊として活動しています。

消防団に入ると準公務員という立場となり、規律に沿って行動しています。



地域のつながりは防災の力に



▲メンバーが団結して地域を守ります。

災害が相次いだ今年。多くの場面で消防団は出動しました。消防団長を勤める山本純さん（68歳）は「最近では地域のつながりが薄くなっているように思えます。防災力を高めるためにも地域のつながりを深める必要があります」と力を込めます。

山本さんの住む上吉田町では、消防団が地元の人と協力して、ほたる祭り前に周辺の草刈りを実施。地域の人たちの交流活動の一つに消防団が参加しています。

研修会など、地域のつながりを深めています。

地域活動に消防団が一緒になつて活動し連携を密にすることで、緊急時の地域全体での対応をしやすくしています。

山本さんは「消防団の重要な役割の一つに火災があつた際の初期消火が挙げられます。実際に火災に遭つた人は、不安な思いから、消防車が来るまでの時間をかなり長く感じてしまします。そこを消防団がいち早く駆けつけて初期消火にあたり不安を和らげることができます」と言います。同時に初期消火にあたる人は、その地域のことを知っている人である必要があると指摘します。

どこにどんな人が住んでいるのか、どの道を通れば最短で駆けつけられるのかといったことは地元の人でないといけません。また、団員でも仕事などの都合ですぐに駆けつけられない人もいます。

そのため、「各地区にある程度の人数の団員がいらないといけません。しかし、近年は消防団の人数が減ってきており、特に山間部ではそれが目立っています。



▶安田地区で行われた消防本部主催の応急救護指導。4人の団員が指導の補助をしました。

▼赤江地区文化祭では、赤江分団が駐車場係を行っています。

「す」と団員の少なさを嘆く山本団長。

それでも活動を続ける団員へは「地域のつながりが薄れると同時に防災力が低下してしまうことを団員の皆さんは理解していると思う。それを防ぐために、各分団が活発に地域活動に取り組んでいる」と感謝の言葉を口にします。

団員が減少する中でも走り続ける消防団。その活動一つ一つがこのまちを守ることに繋がっています。





▲「集まって話すことはあまりないです」と照れ笑いを浮かべる3人。左から正紀さん、純さん、喜正さん。

親子3代でつなぐ思い

消防団長山本純さんの家では、息子の喜正さん（47歳）と孫の正紀（27歳）さんも消防団員。一家でまちの安全安心を守っています。

「おじいさんが昔から消防団をしていたので、小さい頃からポンプ車を見たり出初め式を見に行ったりしており、消防団の活動は身近に感じていました。それがあって不安なく入団ができました」と話す正紀さん。今年で入団2年目になります。

あまり活動に参加できていないと言いますが、それでも「自分が動くことで少しでも地域の役に立てれば」といつも消防団のことを意識しています。

「分団内での交流を通して、地域のつながりの大切さに改めて気づくことができる活動が多いです」と話すのは喜正さん。また、「消防団が地域の人と協力して行っていることとしては、現在、町の清掃があります。今後は、それ以外で地域に根ざした活動ができればいいです。さらにそこに若い人がもつと入ってくれば」と思いを口にします。

親子3代、それぞれが思いを

持つて行動しています。

先日の台風24号の際には、正紀さんと喜正さんが揃ってパトロールに出動。なかなか機会のない親子での活動は印象に残ったと2人は言います。



純さんが団長という立場にあるため、普段の活動で3人が同じ現場に出ることはほとんどありません。また、仕事の関係から、家でも3人が揃う時はなかなかないそうですが、「家で話をするとときに、たまに活動について提案をすることがあります」と喜正さん。親子で本音で話し合うことで、父親の団長という立場を支えています。

一方で、純さんは「3人が消防団で出払うと家の男手がなくなってしまうので、少し不安な部分があります」と本音がもれます。それでも「地域のため、安来のためという思いから活動します」と語ります。

親子で活動し続ける3人からは、地域への思いがあふれています。



身近なところから安心を

近年、少しずつ隊員数が増えているという女性隊。その活動は、1人暮らしの高齢者宅への防火訪問や応急救護講習の補助、操法大会の運営補助、出初め式での放水など、多岐にわた



福島理恵さん

ります。

「消防団に入り、普段から近所の年配の人とはコミュニケーションをとるようになってい

ます。これは、消防団の人間が近くにいるということを感じてから知ってもらい、安心してもらうためです」と話すのは福島理恵さん。女性隊に入って2年目になります。

「普段から地域の人と関係を築き緊急時には素早く行動できるようにしておくことが大切です」と言いながら、「何かが起こ

る前からお互いを知っている状態にしておくことが必要」と繰り返して話します。その言葉からは、防災に大きく関わる「地域のつながり」を大切にしていることが伝わります。

「消防団に入り、普段から近所の年配の人とはコミュニケーションをとるようになってい

ます。これは、消防団の人間が近くにいるということを感じてから知ってもらい、安心してもらうためです」と話すのは福島理恵さん。女性隊に入って2年目になります。

「以前の私のように、この団体のことを知らない人はまだ多いと思います。まずは地域の人に消防団や女性隊のことを知ってもらいたいです」と思いを込めます。

地域の安心安全を守るため、



▲高齢者宅で防火の呼び掛けをする女性隊。



なかうみマソン全国大会では、女性隊が消防署の職員と救護を担当。今年は6人の隊員が参加し、けがをした選手などのケアを行いました。

日々行動する消防団。その人々それぞれが地域への思いを持っています。

このまちに愛着と誇りを持つ彼(女)らの活動はまちを支え、地域にとっては、大きな存在となっています。





地域ぐるみで消防団 を応援しています

市内各所には売り上げの一部を消防団の活動費に充てる自動販売機が設置されています。売り上げの一部は消防団の備品購入や団員確保の活動などに使用。この自動販売機は災害時には飲料の無償提供がされ、被災者への支援も行います。(①)

また、市消防本部では、地域の防災能力の強化向上のため、「消防団協力事業所表示証」を交付しています。

これは、従業員等の消防団活動を積極的に支えている会社などの団体を認定するものです(消防団に所属している従業員の人数等の要件があります)。緊急時の消防団の活動を会社を挙げてバックアップしています。(②)

団員募集の面にも力を入れています。「僕らの町は、僕らで守る」をテーマに独自のPR動画を作成・配信して募集を呼び掛けています。(③)



①



動画 QR コード



②

11社が消防団協力事業所に認定。

地域のためには なくてはならない存在です

消防団の皆さんには消防本部だけでは対応しきれない部分を補ってもらっています。その活躍には消防本部としても大変助かっており、今やなくてはならない存在です。

火災をはじめとする災害時の素早い行動や消防本部主催の訓練などへの協力により、市全体としての防災力向上が図れていることを実感しています。

最近では、地域活動への積極的な取り組みをされている分団が増えて、それにより地域が連携を深

め、防災意識にもつながってきていると思います。女性隊では隊員の約7割が応急手当普及員の資格を取得しています。これにより講習時の指導にあたってもらったりなど、活躍の場を広げてもらっています。

活発な運営をしていただいている一方で、市全体として団員数は不足しています。

危険を伴うことがありますが、大変な面はありますが、一人でも多くの人に地域を守る活動にご協力いただきたいです。



平井消防総務課長

消防団に関する
問い合わせ先
消防総務課
☎ 23-3428

